「猫」　値打ち三文の幸福論

I.A

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
「猫」　値打ち三文の幸福論

【Ｎコード】
Ｎ９７９２Ｈ

【作者名】
Ｉ．Ａ

【あらすじ】
明治頃。作家である靖高は、親友との雑談の中で全ての生き物の為になる「幸福論」を書こうと思い付く。それは彼が人生をかけてでも書こうと云う大仕事になる筈だった。ところが靖高は、大のつく猫嫌いだった。しかし、そんな彼の家で雌猫を一匹飼う事になる。あまねく生き物の為の幸福論を書きながらも、彼はその猫の存在に気の狂わんばかりに怯えつつ、遂には殺してやりたいとさえ思うようになる。それは、全く矛盾した思いだった。ある日、雌猫はとうとう子供を産むのだが……。

第1回

1

靖高(やすたか)は、朝からずっと机に向かって論文を書き続けていた。

空は重たく、今朝からずっと雨が降り止まないでいた。そのせいで空気は酷く湿り気を帯び、それでありながら真冬の様な寒さだった。

窓から表を眺めると、小高い山の中腹に建てられた宅(いえ)からは、一面に広がる田んぼばかりの平野が、白糸の様な細い雨の中に霞んで見えた。道路はそれらを区切る様に東から西、北から南へと全ての方角へ延びているが、そこには人影も殆どなく、たまに自転車などの、泥を跳ね合羽の裾を汚しながら走って行く小さな姿が見えるだけで、散歩を愉しむ人など、いつまで見ていてもやって来る筈もなかった。

都会から愛する女性の為に引っ越して来てもう一年半以上経ったが、相変わらずここの土地柄には馴染めないでいた。

靖高は作家と云う職業を選んではいるが、その元来酷く社交的な性格は、明るく賑やかな雰囲気を水としていた。だから、ここの余りに辺鄙過ぎる田舎暮らしは、決して好もしいものにならないでいるのである。

東京に来ていた妻も明るい女性だったから好きになったのだが、しかしそれが、まさかこんな田舎に押し込められるとは夢にも思っていなかった。

「である為に……」

靖高は文章を書く時、時折声に出していくのだが、それは『哲学に追従する研究者の』と云うよりは、彼個人の癖であった。

今書いている本は、それを完成させるにあたっては包み隠さぬ思想の全てを書くつもりでいるし、またこれの為に、自分の人生の全

ての時間を使い切ろうとも、決して後悔する積もりもなかった。
今や彼にとっては、投げ出す事のできないライフワークとなっているのである。
「旦那様……」
と、下女が襖(ふすま)を恐る恐る開けて入ってきた。
靖高は突然に自分の仕事を妨げられた事に腹を立てた。
「なんだ、声を掛けもせずに！　勝手に入るなと云ってるだろう！」
「申し訳ありません。でもいくらお呼びしてもご返事がなかったものですから……」
「嘘をつくな！　呼び掛けられて、それが聴こえぬものか！」
果たしてそれは、事実であった。下女はどうせ直接云わねば聴こえはしないだろうと思って勝手に開けたのである。
だが、今更そうとは云えない。
「いえ、そんな筈は……」
と、下女は飽くまで自分の過ちを認めぬ上で、
「申し訳ありませんでした」
と謝った。
「なんの用だ。早く云って、さっさと消えろ」
（書き始めるといつもこうだ……）

靖高は、普段からあまり他人に興味を示さない傾向にあるのだが、ひとたび書斎に籠もるとそれは更に強くなるタチだった。
邪魔されたくない――
そういう性格だった。
それは、自分の全ての時間をである。だから書き物をしている最も重要な時には、輪を掛けて非常に怒りっぽくなる。彼はそれが譬(たと)え妻や息子であったとしても容赦しない。とにかく周りから見ると、人が違う様にしか思えない。恐らく神経が鋭すぎるのだろう、無論、悪い意味で。
ある時、執筆の最中に突然部屋の中へ息子が飛び込んできた。ま

だ七歳になったばかりの、やんちゃ盛りである。
だが靖高は、子供っぽいと云う状態に理解を示さない。それが譬え子供相手であっても。
彼の性格の知性派を嘯(うそぶ)く側面は、人は常に『考える』べきだとしていた。それが生き物の頂点に立つ責任であり、特権であると。そういった事を思う人が世に少ない訳ではないが、靖高はそれが極端であった。考えない人間を見ていると腹が立つ。つまり、子供を見ていると腹が立つのだ。
故に、
――我が子がそうあるべきではない――。
だからこそ、その息子が靖高の執筆中に無邪気に飛び込んで来た時、彼は猛然と腹を立てた。
「邪魔をするな！」
と怒鳴りつけて、いきなり殴り飛ばした。息子の頬は腫れ上がり、前歯が二本ぐらついた。
これには妙(たえ)も頭に来て、一週間ほど全く口を利かなかった（直接抗議するのは、流石に恐ろしくてやめただけでもあるが）。
ところが靖高の方は、妻が何を怒っているのかさっぱり解らず、下女らに何があったのかを尋ねる始末だった。
下男下女らは妙から――自分で気づかせなくちゃ駄目――として、「申し訳ありませんが、奥様から口止めされておりますもので、はあ」
と、鸚鵡の様にそれしか云わないので、彼女の機嫌をとる為に随分と苦労していた。
或る時はそんな態度はいけないと一方的に説教し、また或る時は必死になって怒りの理由を聞き出そうとしたり、とにかくその謙っ(へりくだ)た姿は滑稽で、妙が見ていてもあまりに滑稽で哀れに思えた。が、それでもやはり赦す訳にはいかないので、彼女はそんな夫を気にしつつも、努めて怒りを演出し続けた。
一週間経って、靖高がご機嫌とりのプレゼントを持って来たので、

「そんな事じゃなく、寛二郎に謝る事をして下さい」
と云った事で、初めて愛妻の怒りの理由を知った。とは云え、思い出すのには首をひねって、もう一つ二つヒントを要しはしたが。

下女らは、時折自分の仕事を不安に思う事があった。
主人に忠義を尽くすのが自分の役目であるのに、それを果たそうとして怒られるのはどうも宜しくない、と云う訳だ。主人が最も忠誠を必要とする時にこそ、自分は役立たねばならない。当然の事である。だが、当の主人が自分を必要とする時――主人の仕事が物書きであるが故に、自然、その機会はペンを振るっている最中が多くなる――に役目を果たそうとすると、決まって怒られるのである。
何とも滑稽な話ではないだろうか。
それで、二人の使用人は自分の存在意義を不安に思うのである。

「貞方様がお見えですが」
「追い返せ」
靖高は、既に下女を見ていなかった。
「しかし、大切なご用事だそうでございますが……」
「私の仕事より大切な事があるか、莫迦者！」
靖高は、女を一喝した。
(何時もの事だ)
挫けつつも下女は思った。だからここで引き下がれば、後で更に怒られる事も解っていた。
「ただ今お通しして参りますので」
彼女は形だけ報告して、後は客人の案内を強行する積もりであった。
ところが不意に、
「貞方だって？」
と、靖高が振り向きもせずに頭をもたげて云ったのである。
下女は、何か不意打ちを喰らった様な気分だった。

「はい？」
余りに突然の事だったので、つい声がうわずって疑問口調にさえなってしまった。
「貞方が来たのかと訊いたんだ」
靖高も、今度は振り向いて念を押した。
「左様でございます」
（ふむ。きっとまた何か思いついたに違いない）
と、靖高は思案した。
彼が今書いている本は、全ての生き物が幸せになる為を目的としたものであるが、抑抑（そもそも）これを書く切っ掛けを作ったのは、今訪問してきて、玄関で立ちん坊を喰らわせられている当の貞方であった。
その本は、初め数十頁程度の小論文として書く積もりだった。ところが書き進むうちに、どうも簡単なテーマではない事に気がついた。というのも、他人の幸せを願う者としこれほど不適格な人間も居まい、と他人から云われる程に靖高は身勝手な人間なのだが、軽い興味を抱きつつこの論文を書き始めてみると、意外に自分と他者との繋がりを考えさせられ出したのであった。
「幸せとは」
という書き出しで始まるこの論文には、自分の事に一切触れる積もりはなかった。だが、触れずば書けまい、という事に早いうちに気づき、しかも、己の心を裸にしなければならないという考えにまで至った。
それで、いつしかライフワークになってしまったのである。

貞方が、ある時こう云った。
「妻が忌々しい」
彼は、靖高と馴染みの珈琲喫茶で日本茶を飲んでいた。
こんな田舎には不似合いな舶来風の店だが、店主の外国人がこの土地を大いに気に入って、日本人の妻と共に開業した小さな店であった。無論、珈琲などまだまだ田舎の人々には馴染みの薄い飲み物

だが、田舎暮らしに飽き飽きしていた靖高はこの喫茶店を真っ先に気に入り、週の半分以上をここで過ごしていた。
靖高は決まって砂糖抜きの珈琲だったから、声にはしないものの、いつも貞方を邪道と思っていた。
（西洋喫茶に来て日本茶なんか飲むな）
と。
「いや、正確に云えば、妻の飼っているペットが忌々しいんだ。あの野良犬め」
貞方はそう云ったが、実際には野良犬などではない。西洋人から二十円という大金で買った、たいそう立派な大型犬である。数ヶ月前、横濱に鉄道旅行をした際、そこで知り合った何か粉の輸入をしているとかいう外国人の飼い犬を妻が大いに気に入り、三週間も交渉し続けて漸く譲って貰ったものだった。
だがいざ飼ってみると、妻には非常に懐いたが、渋々金を出した主人には、ほとんど見向きもしないのである。何とも莫迦げた話ではないか。
貞方はお茶を少し口に含んだ。
「あいつはお前と同じで、洋風の生活に憧れ過ぎだ。広くもない家の中に、あんなでかい犬を連れ込みやがって。俺達の寝床にまで入ってきやがる」
「寝床に？」
靖高は可笑しかった。
貞方の話に聞いた所では。子供が三人は座れそうな犬らしい。それが二人寝の狭いベッドに潜り込んでくるとは。
「いつも犬を抱いて寝やがるんだ」
（犬に妻を寝取られたか）
と、靖高はますます可笑しくなって、つい含み笑いをした。
今度寝る時はメガネを掛けたまま寝てみろ、妻の浮気現場が見られるかもしれないぞ。と品のない冗談が浮かんだが、それは云うのをやめた。

貞方は、決してペットの名前を云わなかった。
「犬」
或いは、
「野良犬」
と云い、酷い時には、
「畜ち生め」
と、何故か『畜』と『生』の間に『ち』を入れて、吐き捨てる様に云うのである。
訪問して来た客人にすら、
「愚妻の犬です」
と、ともすれば紹介された方が戸惑う様な云い方を平気でするのだ。
お茶を手にしたまま、貞方が続けた。
「動物を可愛がるのは、そりゃいいことだってぐらい、俺にも解るさ。でも、それを誰にも彼にも押し付けるのは間違ってると思わないか？　それなのに、目障りな犬ころをもっと可愛がれとかそんな事、グチグチ云われたくないぜ。つまり俺が云いたいのは、俺があの犬を蹴飛ばす前にどこかへ隠しとけって事さ」
一度興奮しだすと、止まらないタチである。酒を酌み交わしたくない型の男だった。
靖高は犬が好きだから、この話自体には納得し難いものがあった。
「俺はあの犬よりも偉いんだぜ。それなのに多津の奴、俺に餌を買ってこいとかぬかしやがる。本来餌と云うのは、飼われている者が捕ってくるものだ。そりゃあの畜ち生めが店に行って金を払えるわきゃないさ。つまり俺が云いたいのは――」
云いたい事の多い男である。
「個々を保護するべきだと云う事さ。犬を認める様に、俺も認めるべきだとね」
「犬の餌は多津が買ってくるべきだと云いたいのか？」
「そうさ！」

貞方は、だんとテーブルを叩いた。
危うく靖高の珈琲が零れそうになった為、靖高は慌てて小さなカップを掌で支えなければならなかった。
「なあ、どうしてこうも世の中ってのは上手く出来てないんだろうなァ。お前は書斎でカリカリと書き物をしてるだけなのに、奥さんや子供からは酷く敬われてる。それに引き換え、俺は職場で頭の悪い部下共に胃を痛めながら一生懸命働いていると云うのに、多津の奴は少しも尊敬しようとしない」
この後二人の話は、個人の権利の主張について大袈裟に広げる事になった。それは多少の飛躍を伴いながら、やがて全人類から、普く全ての生き物の独自の幸福論にまで至ったのである。
「面白い。幸福論はこれまでも多数書かれてきたが、どれも宗教染みてて気に食わなかったんだ」
と、靖高は腕を組み、椅子に深くもたれ掛かって感心した。主張のない生き物にまで主張を持たせて、危うく収拾がつかなくなる様な幸福論にである。
「書いてみようかな、この論文を」
と、靖高は軽々しく云って、カップを口に運んだ。
気に入りの珈琲は、すっかり冷めていた。

書斎に通された貞方は、いつもの様に本棚にもたれ掛かって靖高を見ていた。
「随分書き進んだなァ」
書き始めてもうすぐ半年は経つが、漸く一巻目が終わろうとしている。このまま書き続けて何巻まで続くのか、靖高自身にもそれは解らなかった。
靖高は、椅子の背もたれを仰け反りつつ、腕を組んで睨み付けた。
「それで」
と、靖高は苛立つ様に云った。
「今日は何の用だ？」

彼が怒るのも無理はなかった。大事な話でもあるのかと仕事を中断してみれば、貞方はにやにやしながら、その腕(かいな)に子猫を抱いているのである。

靖高は、大のつく猫嫌いであった。

貞方は猫の喉元を撫でつつ、その毛で覆われた小さな顔を覗き込んだ。

「君が幸福論を書き出して随分なるが、まだ当分終わりそうもないね。ところで――」

と、貞方は顔を上げた。

「君の本には自分の不幸を皮きりに色んな動物の事が書いてあるが、君が本当に心から信じてそれを書いているのか気になったんだ」

靖高は腹が立った。

ライフワークたらんとして書いているものを、こうもサラリと侮辱されては、譬え親友と言えども当然の事であった。

「何を云いやがる。俺の書く内容に間違いがあるとでも云うのか？」

「そうじゃない。間違いがあるなんて云ってやしないさ。ただ、心が本当かと訊いているだけだ」

貞方の云わんとしている所は、いまいち掴み取れなかった。

「幸福論を書いているが、実際の君はこうして書斎の中で、独り自分の興味に没頭しているだけの事じゃないかって思ったんだ。確かに君は頭がいいからそれでも良い物を書く。でも今回の本ばかりは実際的である必要があると思ったのさ」

――だから猫。

と、貞方は云うのである。

「奥さんは居るか？」

貞方は、不意に訊いた。

「奥さんは確か、無類の猫好きだったよな」

靖高には不満が残った。

第2回

2

「だが、人間だけがその爲に生きると云うのは、どうも正しいとは念われない。我々は理性を以て知性とし、それは確かに人生への活力とするが、形は違えども動物の幸福も結局は同じ所から派生せらるべきものである事を私は強く提唱するものである」

靖高の執筆は、ここの所どうも上手く行っていなかった。だが、妙は頗(すこぶ)るご機嫌であった。

貞方は靖高を一方的に丸め込もうと、幸福論の執筆に際し如何に嫌いな生き物に慣れる必要があるかを懸命に説いた。妻が友達から引き取り手を探すよう頼まれた時、恐らくこれは今の靖高にこそ必要なのだと思い浮かんだのである。

だが靖高は、執筆と掛けてその重要性も解らないのかと莫迦にされる事が我慢ならなかっただけであった。無論、貞方の意思を深く汲むのが嫌だと云う訳でもなかったが。

だが、何よりも妻である。

妙は何も云わないが、彼女が猫を飼いたがっているのはその表情から容易に窺い知る事が出来た。

その妻の無言の想いにとうとう靖高は折れ、彼が承諾した事で話が丸く収まると、貞方は早々と引き揚げて行った。

妻ははちきれんばかりの笑顔で、両手の平でくしゃくしゃに丸められそうな程小さな子猫を抱え、飛び跳ねて喜んだ。

一方靖高は、何よりも嫌いな猫を前に、貞方に対する恨みが胸中ふつふつと湧いて来るのを感じたが、これほどまでに愛妻に喜ばれると、今更、

「やはり猫を飼うのはよそう」

などとは云い出せず、とにかく自分が慣れるまでは決して書斎に近づけないように云い聞かせて、自分はさっさと独りになる為に書斎へと引き揚げて行った。

「あなた。この子の名前、何がいいかしら」

と云う妻の声は、既(すで)に聴こえなかった。

さて、と、再びペンを持ち、机を前ににかじりついた。筆は流れる様に運び、実に好調であった。

（このぶんなら、来年内に二巻も書き上がるかもしれない）

と、独り嬉しく思っていた。

窓から空を眺めると、遠くの山が霞む程度の柔らかな雨が降っている。緑の濃い山からは白く靄が立ち昇り、まるで昔話の様な幻想的な景色がそこにあった。

靖高は、その山にも居るであろう動物達が、雨を除けながら、或いは濡れながら生きている姿を想い浮かべ、彼らは穏やかに、そして逞(たくま)しく、生まれながらにして与えられた幸福のみを享受しているのだと、感慨深い想いに耽った。

ところで、彼は周囲には単に猫が大嫌いだと云ってあるだけで、本当の事は誰にも話していないが、実は靖高は猫に対して酷い恐怖症なのである。

それは、子供の頃のトラウマに原因があった。大体動物が恐ろしいと云う者は、大抵過去に何か負うものがある。

彼がまだ四歳になったばかりの可愛い盛りの事だった。

悪戯を仕掛けたのは靖高の方だったが、攻撃性に優れていたのは、親の友人宅に密かに飼われていた山猫だった。

当然である。

親達の見ぬ間に石をぽんぽんと投げつけて遊んでいたが、山猫がゆったりと近づいて来た時、その手を檻の隙間に入れて顔を叩こうとしたのだ。

当然、噛み付かれた。腕に。

親が慌てて友人を呼んだ。
飼い主が山猫に飛び掛かり口を放させたのは、時にすれば十秒程度だったかも知れない。しかし靖高には、何もかもが永遠の静止をした様に感じられ、その中で己の腕の皮膚を穿ち、肉を裂く何千本何万本もの鋭い牙だけが、唯一動いているもの様に思われた。
そのとき間近に体験した、荒々しく、四肢を萎えさせる程臭い鼻息と、巨大なビードロの様に光る恐ろしい猫の両の眼(まなこ)は、靖高の心に一生の恐怖を刻み込むのには十分過ぎる程であった。
自尊心の高すぎる靖高は、猫ごときが怖いなどと誰にも知られたくなかった。
無論、妙にさえも。

「幸福とは本来、平坦で眞っ直ぐな道を往くものである。全ての人間が型に嵌められた道を往けば、これ程危険のない社会はあるまい。或いは全人類が隣人に対して無頓着で有っても好い。ただひたすらに歴史の歯車として存在するのである。一匹の女王によって完全に統制された蜂や蟻の様に。だが、其れは知性と理性を持ち併せ無ければこそ成し得る社会形態であり、つまり、理と知の人間が其れをすれば、忽ち崩壊の一途を辿るのである。
「人間を型に嵌めおける大きさには限界があり、そして其れは決して大きな型枠ではない。安全で崇高な社会には、二枚の紙が張り付くが如く、危険な社会も併せ持っているのである。
「人間と動物は間近にありながら、その二枚の紙の様に分け隔てられ、動物の歴史と人間の歴史は、交差こそすれど、決して融合するものではない。互いを殺し合い、食べて生きるそのおぞましい関係こそが本当の姿なのである。
或いは人間と一緒に住み、寝食を共にし、其処で生を全うする動物も居るが、彼らとて所詮は奴隷の身である。絶望的状況に追いやられた時、一番始めに処分されるのは彼らである。
それならば人間が動物を眞に幸福にするなど、不可能であると云

う事になる。
果たしてそれは、結論だろうか？」

――その瞬間。
――血が凍った。

何故そういう事が起こるのか、靖高には理解が出来ない。と云うより、したくないのだ。それは靖高の最も恐れている事の一つだった。同時にそれは決して起きてはならない出来事の一つでもあった。彼の今の状況――執筆中――を考えれば。
ニャア――
と、聴こえた。襖の向こうで。
だがその後は、さらさらと降る雨音以外何も聴こえて来ないまま、時計の一分、二分と時を刻む音だけが煩く過ぎた。
（どうしてそこに居る？　あれほど云っておいたのにもう近づけるとは、一体どういう馬鹿な女だ）
耳のせいだとか、或いはもう居なくなったのかな、などとは思わない。全く音を立てなくとも、それでもそこに居ると信じて疑わなかった（とは言え、実際に居るのだが）。
靖高は、恐ろしいものの存在を確かめる為に、躊躇いながら背中を振り返ってみた。
襖は閉まっている。が、まるですぐ側に居たかの様に聴こえた猫の声が耳に残って、尚も怯えていた。襖のみが隔たりであると云うのは、これほど安心を齎さない状況もないだろう。
やがて、カリカリと襖を掻く音が響いて来た。まるで手を伸ばした指先の辺りから聴こえてくるかの様であった。
音はやまない。
靖高の耳の奥に鋭く響いて来る。
しかし恐怖心というものは、そこに押し迫っていたものが危害なく過ぎると、間も無く怒りへと変貌するものである。

――ニャア。
と、もう一度あの声が靖高を震わせたのを最後に、襖を掻く音も消え、同時に『居る』という気配もなくなった。
靖高は一先ず落ち着きを取り戻そうと、大きく深呼吸をした。額にはいつの間にか汗が滲んでいた。それからもう一度耳を澄ませたが、やはり小動物が居る様な物音は全く聴こえなかった。
刹那、靖高は自分の胸に、反動的に燃える様な怒りが噴き上がって来るのを感じ、また、それを抑える事も出来なかった。
靖高は座布団を蹴飛ばして立ち上がり、襖に駆け寄り木枠を掴んだ。一瞬、それでもなお開けるのを躊躇ったが、自分の心にあれは居ないという確信を改めて云い聞かせ、勢いに運命を任せる様に思い切り押し開けた。
やはり、猫の姿は何処にも見えなかった。
「妙！　妙！」
靖高は入り口から半身を出し、何処かに居る筈の、年の離れた愛妻の名を叫んだ。
「なあにー」
と彼女の甲高く薄い声は、やはり居間から聴こえてきた。が、妻は呑気な返事をしただけで、一向に来ようとする様子がなかった。その彼女の対応が、最も望ましくない者に仕事を中断させられた靖高を更に苛立たせた。
「妙！　来るんだ！」
と、靖高は激しく叫んだ。
その穏やかならぬ口調に、妙は、靖高が執筆中であるのを思い出した。
彼は仕事中、決して人を書斎の中に入れないのだが、またそれと同時に、自分から出て来る事も決してしない男であった。それが今、書斎から出て来ている。しかも明らかに怒声であろう勢いのある声で自分を呼んでいるではないか。これはただ事ではないと漸く察し

た妙は、それまでしていた雑事をよそに、慌てて廊下をへ走ってきた。
確かに夫の声は廊下に響いていた。が、やって来てみると書斎の襖は隙間なく閉じているのである。
妙は、外から声を掛けた。
「……あなた……呼びました？」
彼女の声は、多少の怯えを持って襖越しの靖高の耳に入り込んだ。戸が閉じていたという事が、妙にとっては殊更に威圧的だったようである。それは、急務と呼びつけておきながら簡単には目通り赦さぬと言った、まるで徳川政権の傲慢たらんとした悪家老の様な威圧感であった。
「入れ」
と、中から鋭い響きを持った一言だけが聞こえてきたので、彼女は襖を開き、一瞬躊躇いつつ、それでも夫の気勢を抜こうと思って、努めて明るい表情を見せた。
「なあに？」
もともとお嬢様として躾られた訳でもないので、主人に対する礼儀は幾分欠ける所がある、可愛いが安っぽい女である。
靖高は、書棚の前で分厚い哲学書を開いて立ち、
「……俺は仕事をしている最中だ……解ってるか？」
と、静かに云った。妙には全く振り向こうとはしなかった。
妙には、自分の主人が何を云おうとしているのか少しも理解出来なかった。
（自分から呼びつけた癖に）
仕事の邪魔をしたなどと責めようと云う積もりなのだろうか？
随分（ふざけ）巫山戯た冗談だ。そう思うと、先程怯えていた自分が馬鹿らしく思え、逆に腹が立って来た。
「何なの、一体？」
妙は、一転して強い口調で靖高を責めようとした。事情を知らない彼女にとって、それは仕方のない事だったかも知れない。だが、

それでも軽率過ぎた事には違いないだろう。
靖高が狂人だと云うのであればいざ知らず、それどころか彼は本を書くを生業としている、至って明知に長けた『理屈屋』なのである。いやむしろ、『屁理屈屋』とまで云っていいのかもしれない。また、彼の訳もなく怒ったりしない性格は、妻である妙自身が一番よく理解している筈だった。尚且つ、ひとたび怒れば見境もなく、手が付けられない事も承知していた。にも拘わらず、彼女はそれら一切を忘れて反抗的な態度をとってしまったのである。
靖高が振りかぶるのと分厚い哲学書が飛んで来るのは、ほとんど同時に見えた。本はどすんという大きな音を立てて、妙のすぐ脇で壁に跡を残した。無論、靖高に外す積もりはなかった。怒りで手元が狂っただけの話である。
二千頁も三千頁もありそうなこの本を、これほどの勢いで打付けようと飛ばすとは。彼の怒りの凄まじさに、妙は改めて驚き、且つ怯えた。
だが、その後の靖高の口調は、意外なほど抑えられたものであった。
「俺がそのようにと命じた事は、そのようにやるんだ。解ったか？」
妙は返事をしない。というより、出来ないのだ。当然だろう、何の事を言われているのか、全く解らないのだから。
「出て行け」
妙は、これ以上靖高に口答えも質問も赦されないと悟り、
「わかりました……」
と、一言だけ残して、ゆっくりと、しかし出来うる限り素早く、逃げる様に体を滑らせ、襖を閉めた。
閉めると同時に、妙の胸中に納得のいかない怒りにも似た感情が、少しずつではあるが、再び湧いて来た（彼女はどうやら、陰でしつこく思うらしい）。
不図、廊下に目をやると、そこにはもはや彼女の愛猫となった、事の発端者が現れた。

「どうしたのォ？」
ネネ（とは彼女が付けた名前である）は一鳴きし、妙の足元に擦り寄ってきた。
「あっちへ行きましょう、ネネさん。こんな所に居るとあなたまでとばっちりを喰うわよ」
自分のその言葉に、彼女ははっとはしない。もしここで妙が気付いていれば、この後のネネの悲しみは免れたかもしれなかったのだが。
彼女はネネを抱きかかえて、居間へと歩いて行った。

ネネは基本、家猫だった。
外に出せば病気に感染し、又、蚤などを連れて戻って来るかも知れないからと、妙は外へ出したがらなかった。
当然、靖高が一人で留守番をしている時は、ネネとだけで邸内に居る事になる。
書く、という作業は、並ならぬ集中力を必要とし、非常に神経を使うものである。用もない他人に側に居られると、自然、集中力は欠ける。だからこその書斎である。さもなければ、客間で仲のいい友人と談笑をしながらでも筆は走る筈である。
今、靖高に恐怖を与え、非常に効果的な方法でもってして彼の生涯の一瞬間を邪魔立てしようと企てている者。
猫。
無論、当人にその気は、ない。が、靖高にしてみれば、猫にその気があろうがなかろうがである。
いつ、どこに現れるのか全くの予測不能であり、気付いた時には既に遅しと嘲笑うかの様に靖高の肝を冷やすのだから。
靖高の仕事は、結局の所遅れていた。無論、ネネがやって来てからである。
「だが、自分が書こうとしているのは幸福論。猫を追いやっていて、全ての生き物の為になど書けるものか」

そう思う一方で、貞方の嫌がらせに嵌められた。第一、幸福論を書く為に必要だなどと、奴の穿鑿（せんさく）に過ぎないのではないか。と云う疑念ばかりが、彼の心に浮かぶのであった。

第3回

3

ここで一人の男が登場する。名前を梅村喜市（きいち）と云った。
彼は靖高の思想に熱狂的と云える程に深く傾倒している若者だった。
喜市は近隣一（と云っても、ゆうに三粁（キロメートル）の道のりを隔てていたが）住んでいたのだが、靖高が出無精で、しかも知人以外には滅多に会おうとしない性格な為、二人の面識はかなり薄かった。それでも靖高にその鋭い哲学思想を語ってもらいたくて、時折訪ねて来ていた
今までに何度足を運んだろうか？　会ってもらえた事は二回しかなかった。それ以外は、いつも冷たく拒否され、結局は妙と雑談をして帰って行くのである。
だから妙は、いい茶飲み友達が出来たと喜んでいた。
それも、若い。
そしてまた、彼も大の付く猫好きである。
「先生は素晴らしい哲学者だと、常々尊敬しています」
この若者は、そんな事を云っていつも妙を喜ばせていた。主人を褒められて悪い気がする妻など居まい、彼女はもう一杯お茶はどう？　お菓子を焼いたの、いかが？　と、頻（しき）りに勧める。
「でもやはり欠点と言えば」
と、喜市は妙の焼いたお菓子を頬張りながら云った。
それを妙が続ける。
「どうしてあんなに猫が嫌いなのかしら？　お陰で結婚した時、私の猫は実家に預ける羽目になってしまったのよ」
それから程なくして彼女の猫は死んでしまった。山に囲まれた田舎の事である。人里に下りて来た何かの動物に殺されたのだろうと思われていたが、事実それは、人に捨てられて凶暴化した野犬だっ

た。猫は体中を引き裂かれて殺され、山沿いを流れる小さな谷川に、まるでごみの様に棄てられていた。その変わり果てた姿に、妙は、彼女自身の責任ではないとは云え、後々までずっと後悔していた。母などに任せず一緒に住んでやっていれば、もしかしたらこんな事にはならなかったかもしれないと、根拠もない、やるせない想いに嘆き続けていたのである。

以来、主人が為に猫を飼う事はならず、妙の心の隅には、その事への後悔がいつしか寂しさとなり、ずっとしこりとなって残り続けていた。だから気が向いた時などに喜市の宅まで出掛け、彼の飼い猫を抱かせてもらう事もしばしばであった。

だが漸く、妙の宅にも待望の猫が飼われる事になった。

「こんにちは、先生はいらっしゃいますか？」

誰も居ない庭にまるで当たり前の様に入って来て、その癖莫迦に丁寧な立ち居振る舞いを見せている。手足を爪の先まで伸ばし、顎はぐっと深く引いていた。純朴そうなとても真っ直ぐな瞳を向け、それはまるで、戦場へ赴く哀れな兵士か、或いはお使いを申し付けられた丁稚奉公の様だった。妙が思わず吹き出したくなる程滑稽な姿である。

それが果たして真面目過ぎるのか身勝手なのか、全く妙の理解を超えていたが、しかし一緒に話していると実に楽しいので、彼女は喜市を必ず笑顔で迎えていた。

「いらっしゃい」

「こんにちは。先生はいらっしゃいますか？」

「居るわ。でも朝からずっと書斎に籠もりっきりだから、きっと今日も会えないと思うわよ」

――そうですか。

と、喜市には別段がっかりした様子もなかった。それがいつもの事だったからだ。

「でもどうぞ、暇なら上がってちょうだい」

「勿論、暇ですよ。それじゃあ……」
妙だけが相手となると、喜市のその慇懃な態度は途端に崩れてしまった。要するに慣れきった相手であり、そして同時に尊敬するに価しない人物でもあると云う訳だ。その失礼な判断を、彼自身果たして意識してそう思っているのかどうかは解らないが。
客間に通され、洋風の大きな椅子に沈む。喜市は、他の家では見た事もないこの柔らかな椅子をとても気に入っていた。一度深々と沈んでから、いつも二三度小さく腰で跳ねる。そして決まって無邪気な笑顔を綻ばせるのである。そうしている内に、やがて妙が手製のお菓子を運んで来る。それがいつもの流れだった。だから喜市は、
「今日はどんなお菓子を焼いたんですかァ？」
と、客間から姿を消した妙に声を上げて訊いた。それは一つには、自分が来ている事をさりげなく靖高に伝える積もりでもあった。うまい事先生が顔を出せば、と思ったのである。
だが靖高はおろか、妙の返事すら返って来なかった。
――いつもと様子が違うな。
と、喜市は感じた。そういえば妙の様子も妙に浮き浮きした所があった様に見えた。
漸く妙が戻って来ると、彼女はその腕に一匹の猫を抱いていた。
喜市は驚いた。
――何故猫が？
「可愛いでしょ？」
と、妙は無邪気に自慢した。
「実はあの人、いま幸福論を書いてるの。それがこの世界に生きる全ての生き物の為に書くそうで、それなら慣れる必要があるって貞方さんが連れて来たの。あの人、何にも云い返せないまま引き取ったのだけれど、ねえ、だからと云ってあんなに嫌いな人が行き成り仲良く出来る訳ないじゃない。だから私が可愛がってるのよ」
妙は嬉しさを隠しもせず終始にこにことして、ネネを力一杯抱き締めた。ネネは後ろ足をもがき、少しばかり窮屈そうだった。

「良かったですね」
と、喜市は世辞のない笑顔で云った。それから暫くはいつもの茶飲み話だったが、今日は猫が居るせいか、いつにも増して熱く語り合っていた。無論、猫の話である。
そうやって熱く喋っている内に、喜市の胸に一つの思惑が浮かんで来た。
（先生が飼われている猫）
実際にはそうとは言い難い主従関係であったが、崇拝者の心理にそんな事はどうでも好かった。憧れの人物の宅に飼われていると云うだけで、彼にとっては充分な名目なのである。
「ねえ……奥さん」
と、愛嬌あるこの漢には到底似合わぬ薄ら笑いを浮かべ、もじもじした調子で切り出した。
「その子はこれからずっと飼っていくんでしょう？　そうしたら、その子を一匹だけで終わらせてしまうのは勿体無いと思うんです」
彼の云わんとしている所をすぐに察する事が出来る程、妙の頭の回転は早くなかった。
「僕のシュンスケは牡です」
ネネは牝だった。そう云われて妙は漸く気づいた
――あの人が怒らないかしら？
そんな事を考える程の機転も、この女にはなかった。
妙は掌（て）を打って喜んだ。

第４回

４

その日の夕餉は一人早々と済ませて、幸福論を書く為に自室に戻った。長い廊下、広々とした質素な造りの庭の前を通って。

東京に住んでいた頃の宅も広い庭を所有していたが、ここの庭はそれから思うと更に驚く程広かった。靖高として不満なのは、所謂日本庭園などと呼べるようなものではなく、所々に植樹されているだけの広場とでも云う様な、奥行きも深みもない詰まらない景色だと云う事だった。だからその庭自体よりも、それより遠くに広がっている田園風景の方がずっと好きだった。

久しぶりに雨は上がっていたが、雲は未だに厚く、風に木々は凪ぐ程に強く、月明かりの恩恵を受けない庭は一寸先も見えなかった。

靖高は襖を片手で押し開け、暗い書斎の中に入り、そうして襖をすっかり閉めた。慣れた盲人の様な正確さでマッチを取り上げ、洋燈に火を入れると、部屋は明るく灯され、机上にある分厚い原稿の束の、鉄の重しに押さえられた姿が煌々と照らされた。

風は怒った様に庭中の草木を揺さぶり、上空を切り裂いて通り行き、靖高はそんな乱暴なざわめきが好きだったので、むしろ気分の休まる心地だった。

靖高が原稿を途中から厚く掴み、持ち上げて広げ、更に数枚捲ると書きかけの頁が現れた。

「生き物の本質を捉えて云うのであれば、幸福の形は眼に見えて違うだけで、それらが求める精神自体は全て同じである。善であれ悪であれ、それが当人の求めた幸福であるのに間違いはなく、最終的な形は全く反対であるが、然しながらそれは一見してその様に見えるだけで、幸福の動機の源泉は寸分変わらぬ所にある。

生きている幸せを享受している者には、これから死に臨む者の気持ちが理解出来ない様に思われる。表面上の幸福の意味だけを互いに主張していれば、それは決して相容れない意見なのだから理解し合うのは恐らく不可能だろう。

だが、生きる事に拠って、或いは死ぬ事に拠って獲られる幸福が一体何であるのかを考えるのではなく、何故死にたいのか、何故生きたいのか、その爲に用意された心の材料はこれであると出し合えば、結局は全て同じ精神構造の上に成り立つ幸福の正体が見えて来る筈である。

つまりあらゆる動機は多角面的であるが、その根源は結局一面にのみ集約され、則ち唯一無二の幸福の爲の精神構造を基に派生して、全ての動機が存在しているのである。

何かを食べたいと云う動機も、誰かに逢いたいと云う動機も、何処かに遊びに行きたいと云う動機も、全てである。そしてそれらは、その目的が達成せらた後でも、達成せられる前と幸福の構造が変わる事はなく、よって時間と共に理解が複雑を極める事はない。複雑に思われるのは、その見た目に惑わされているだけである。

幸福の精神構造がその様に変わらないのであれば、それは人も動物も同じ筈であり、然るべくして全ての生き物は、全く同じ精神で幸福を求めるのである」

ふと、襖の向こうに人の声を聴いた気がした。

（気のせいだろうか？）

そう思って耳を澄ませた。小さな物音が聴こえ、どうやらそうではないらしいのが分かった。

「誰だ？」

来て、すぐに向こうから声を掛けない奇妙さに、靖高は家内の者でない様な気がした。

――返事をするだろうか？

その思いは、そういう考えから来るものだった。だが、靖高の懸

念とは裏腹に、その主はすぐに返事を返して来た。
「夜分遅くに失礼します。梅村です」
――客、だと？
益々以て奇妙である。何故、下男らの取次もなく、若者の客が（その高い声で、若者である事は容易に知れたのであるが）勝手知ったる我が家の様に入って来たりするのだろう？
「誰だと？」
「梅村です」
「知らんな。だが何故そこに居る？　誰の赦しを得て入って来たんだ？」
「奥様のお赦しを頂いて参りました」
それを聴いて、靖高は更に腹を立てた。妙は何故、主人の執筆を分かっていてそういう事をするのか？　しかも勝手に上がらせるなど、一体どういう積もりかと怒鳴りつけてやりたいものである。
「帰りたまえ。私は赦していないのだから」
「実は先生に是非ともお聴きしたい事がありまして、こうやって参らせて頂いた次第であります。」
人の言葉を理解せぬろくでなしだと、靖高は思った。
「帰るんだ。私の云う事が解らないのか？」
しかし梅村は平然とした声で、
「先生は今、幸福論を執筆なさっておられるとお聞きしました。その内容は人間の為だけでなく、凡そこの世に生きる全ての生物に普遍的に通用するものであると聞きましたが」
と、自分の思う様に勝手に話を進めて行った。
靖高は襖を開ける気にもならず、もうこれ以上話すのは止める事にして、再び執筆に没入しようとした。
「聴きたいんです。それがどういったものなのかを。駄目ですか？」
靖高は応えない。
「先生。僕は是非ともお話しが聴きたいんです。先生の唱える幸福論と云うのが一体どの様なものなのか、凄く興味があるんです。お

願いです。聴かせて下さいませんか」
（何と嫌な小僧だろう）
更に返事はしなかった。
しかし、それにしても妙の口の軽さには腹に据えかねるものがある。主人が執筆中の本の内容を他人に話すなど、有ってはならない事である。靖高の腹立ちは、時間が経てば経つほどに増して行き、梅村の声を聴くほどに強い不快感となって胸の内に渦巻いた。
しかしながらこの小僧、少しも相手にしていないと云うのに、その諦めの悪さは尋常ではないとも思わざるを得ない。
それにしても、妙は何をしているのか？
靖高は幸福論への没入を決め込み、梅村が帰るに任せる事にしようと思ったが、その考えは間も無く挫かれるのだった。
「先生のお書きになってらっしゃる幸福論と云うのは、普く全ての生き物の為だと聴きましたが、そんな事が実際的に可能なのでしょうか？」
そう云われた時、靖高の胸中に、
――随分と生意気な口を利く奴だ。
と、抑え兼ねる苛立ちが産まれ、ともかくも莫迦にされている様な気がしてならなかった。到頭靖高は腹立ち紛れに、
「不可能だな」
と、梅村の質問に応えてしまった。そして更に、
「多種の生き物同士がお互いを尊敬するなど幻しだ。実際には隷従するしかない」
と、続けて講釈してやったが、それは教えてやると云うよりも、強く突き放す様な冷たい言い方をした積もりだった。だが、梅村には余り効果はなかったらしい。
「と云う事は？」
梅村の声には、縋る様な震えが籠もっていた。
「その種の幸福はその種で考えるしかない」
「そんな！　それじゃあ結局、幸福論には意味がないと云う訳です

か？　先生、それはあんまりだと思います！」
　梅村は酷く驚き、抗う様に思わず襖を叩いた。戸は低い音を立てて揺れ動いた。
「それでは一体何の為にそんな本を書いてるのですか？　実際に不可能なら、意味なんて何処にもないじゃないですか！」
「唯それだけの事で無意味かどうか、どうして解る？　重要なのは幸福の源泉を知る事だ。それには幸福の理論を展開し、追究しなければならん」
　梅村は頷いていた。その憤慨した様子が瞬間的に消え、既に落ち着いた様に感じられるのが、靖高には何だか酷く奇妙なように思えたが、とにかく話を続けた。
「一見すると幸せは個々によって根本から違う様に見えるが、それは実体に過ぎない。実体は本物ではなく、仮初めの姿だ。目に見えるからその様に取り違えるのだ。精神は最も単純な結晶体の様に、普遍的に全ての生き物の源泉にある。個々に精神の源泉が幸せと感じる物を共通して持っていなければ、人は人と愛し合う事は出来ない筈だ。ましてや真に動物を愛しく想うなど、天地がひっくり返ろうとも不可能だ。その源泉の上に経験が塗られ、人々をそれぞれ違う道に歩ませる。解るか？」
「すると、その源泉にある幸せの根本とも云うべきものが解き明かせれば、人間同士はもとより、動物や植物とも唖み合う事も無くなると云う事ですか？」
　靖高は再び口を閉ざした。
「解ります、先生。僕には解ります。幸福をもしも人間だけの物にしていたら、これほど不幸な事はありませんからね。人間は生き物の頂点に立っていますが、その責任の重さを少しも感じてない。だから、結局はその罪を被って他の生き物が不幸にも中途でその生を奪われる事になるんです。素晴らしいです。僕には先生のおっしゃる事が本当によく理解出来ます」
　梅村は酷く感動していた。

「先生はその根本を解き明かそうとしてるんですよね？」
――だからこそ書いているのではないか。
応えるのも莫迦莫迦しい質問だった。
「所で」
と梅村が云う。
「先生には嫌いな生き物がおありですか？」
「猫だ」
とは、云わない。
当たり前だ。何故自分の弱点を他人に教えねばならないのか。抑抑それが幸福論と何の関係があろうか？　靖高は、自然腹立たしくなった。その質問に応える代わりに、
「帰り給え」
と、再び冷たく強い口調で云った。
梅村は、直ぐには応えなかった。
靖高も、梅村の反応を見ようと、暫く押し黙った。
やがて、梅村が口を切って、
「僕は」
と、靖高の返事を期待しないかの様に続けた。
「猫が好きです」
（――こいつ）
その言葉が含む音の軽さは、その間と云い意図と云い、あからさまに靖高を怒らせるものだった。
（知っている。その上で俺を莫迦にしているんだ――）
所でこれが果たして、本当に彼をからかって云った言葉なのか、それともその様な意図は靖高が勝手に妄想したものなのか、それはとにかく解らない訳だが、しかし靖高の猫嫌いを知った上での云いようであるのに間違いはなかった。
だから刹那的に怒りを起こしつつ立ち上がり、思わず襖を押し開けた。が、既にそこに梅村の姿はなく、すぐに廊下に顔を突き出して見たがやはりどこにも見あたらなかった。

「餓鬼め……」
梅村の去った方を睨みながら、歯ぎしりする様に呟いた。
靖高が恐ろしさに身を震わせたのは、翌日の朝餉の時であった。
「清(きよ)」
と、御飯を盛る下女に声を掛けた。
「昨夜、どうして私の赦しも得なければ案内さえもせずに、勝手に客人を通したのだ？」
下女は、目を丸くしている。
「申し訳ありませんが旦那様、あたしには何の話か解りませんです」
そこで表で掃除をしている下男を呼びつけて同じ様に訊いたが、やはり知らないと云うのである。
靖高は腹を立てて、
「梅村と名乗る若者が俺の部屋まで来たんだぞ！　お前達が知らなければ誰が知っていると云うんだ！」
と、激しく怒鳴った。だが、それでも二人は全く知らないと謝るばかりである。
妙はと云うと、昨夜は珍しく早い床に就いていた。だから当然知り得る筈もなかった。
だが、である。
彼女が云うには、梅村家はつい先日、父親の仕事の都合で蝦夷――今は北海道と云うべきか――に引っ越してしまったと云うのである（つまる所、邪魔者として災難を被ったと云う訳だ）。だから彼が訪ねて来るなど有り得ないと云った。
それでも確かに梅村と名乗ったと靖高は云い張った。事実、そうであった。
「どんな声だったの？」
妙は不審に思って訊いた。
「幼い声だったな。まだ十五か六ぐらいだろう」
「いやね、彼は大学も卒業してるのよ」

「ふん。やけに高い声だからそう思ったんだ」
「そんな筈は――」
だって、どう聴いても高い声なんかじゃないわ。と、妙は付け加えた。
それなら一体、誰が梅村の名を騙ってきたと云うのか？　しかも、ただ靖高の幸福論を聴く為だけに。
下男に、改めて誰の姿も見なかったのかと問い質した。
「ハア、見ておりません。ゆんべは遅くに庭へ行きましたが、旦那様の部屋から灯りは見えたども、表にはだあれもおりませんでした」
下男は頭を何度も下げて云った。
なんと云う役立たず共だろうと靖高は思った。
それから、
――只、
と下男は云う。
「あの時、庭でネネが旦那様の部屋をジッと見ているみたいに居ましたもんで、わしゃあ、こりゃいかんと思って離れた所からネネを呼んでおりました。もしか不審な奴だと仰るんなら、わしの声を聴いて逃げたかもわからんです」
下男如きの考える、辻褄の合わない不合理な発想だった。
その話の中で靖高が特に身震いしたのは、ネネが自分に構っていると云う、今の話題の論点から少々ずれた所だった。
これに続いたのは殆ど雑談の様だったが、だがしかし、これこそが最も靖高を恐ろしさに怯えさせたのである。
その時下男は、幾度となくネネに呼び掛けたが、ネネは耳をこちらに振るだけで全く振り返ろうとしなかった。
そうしている内に、宅の中から一匹の三毛猫が現れた。
ネネはそれでもじっとしていたが、三毛猫がネネに早足で歩み寄ると、突然二匹は互いの体を擦り寄せ、少しばかりの毛繕いをして、それから三毛猫はフイと離れ、そうして下男を見ながら、そのそばを悠然と歩いて去って行ったと云うのである。

下男はその様子を唖然と見ていたが、振り返ると最早ネネの姿も見あたらなかった。ネネは、妙の元へ帰って行ったのである。

――三毛猫ですって？

「シュンスケだわ！」

それを聴いた妙がどこか恍惚とした様な表情で叫ぶ様に云った。

「それは梅村君の引っ越しの時に捨てられていったシュンスケに違いないわ。きっとネネに逢いたくて来たのよ」

その猫の正式な名前――妙が教えてくれた。

「梅村シュンスケよ」

第5回

5

その猫の名前は、シュンスケと云う。
片仮名で書くモダンな名前である。
飼い主である喜市が付けた名で、付けられた本人も気に入っていた。その上喜市は、もっと家族としての絆を深めたくて、自分達と同じ名字も与えた。

――梅村シュンスケ。

それが彼の最終的な名前である。
五疋の兄弟は産まれてすぐに親から引き離され、そこから人伝に見知らぬ宅へと連れて来られた。だがその宅でシュンスケだけが居場所にあぶれ、そこから更に引き取り手を探すべくたらい回しにされたが、それでもなかなか飼い主は見つからなかった。漸く喜市が彼を気に入って飼い主となってくれたのは、もう随分人手を回った後だった。その為喜市には、シュンスケがどこの宅からやって来たのか、その血の繋がりは全く教えられていなかった。
しかし、シュンスケ自身は自分の親を判っていたし、親も彼を知っていたのだった。
喜市はシュンスケを大いに可愛がったが、シュンスケにはこれがどうも好ましからず、大抵はその手から逃れていたが、ともするとシュンスケから喜市の膝に乗って行く事もしばしばだった。
シュンスケにとって喜市は最も信頼に足る人間であり、お陰で自分の境遇を幸福に思い、その喜びに満足して暮らす事が出来た。
或る日シュンスケは、動物的な本能で母の住んでいる宅を知った。

それからは時折散歩のついでに訪れ、その庭に潜り込んでは会いに行っていた。母親は自分の産んだ子供の中で唯一会いに来てくれるシュンスケを愛しく想い、それが彼女の毎日の楽しみの一つだった。

彼女の飼い主は、時折見るシュンスケがよもや愛猫の息子であるとは思わず、ただ猫好きの性格だけで彼の訪れを歓迎し、とにかく何もかもが円満だった。

シュンスケは母親と一時の愛情を交わし合い、母親の飼い主を観察し、そうして一日の半分をそこで過ごして帰って行った。

だが宅に戻っても、大抵喜市は帰宅しておらず、彼が帰って来るのを待ちながらのんびりとした有意義な時間を過ごすのである。

シュンスケは生まれつき気性が大人しく、喧嘩をすればほぼ連戦連敗だった。それでも母親への路だけはどうにか確保し、その幸せだけは一生手放すまいと通い続けた。

或る牝猫に恋をしたが、それは奪えなかった。

又、別の可愛らしい牝も好きになったが、結局喧嘩に勝てなかった。

それで仕方なく、と云う訳では決してないが、シュンスケは母親の元へ通い続けた。

だが、恋はしたかった。

もっと単純な、愛に拠る幸福が欲しかったのだ。

或る日、いつもの様に母親のもとへ行くと、彼を笑顔で迎えてくれる女性の姿が見えなかった。そこに残っていたのは年老いた夫婦だけだった。

シュンスケには、特別その事を気に留める積もりはなかった。一体どんな人間が母の面倒を見る事になろうとも、それが彼女の境遇に大きな変化を齎すとは思わなかったからであるが、それは間も無くして間違いであるのを思い知らされる結果となってしまった。老夫婦では、彼女を守りきれなかったのだ。

――母は、野犬に殺されてしまった。

引き裂かれ、喰い散らかされ、まるで汚い無惨な姿となって、山沿いを流れる小さな谷川に棄てられていた。

幾日も経たぬ内に老夫婦はそれを見つけたが、だからと云っておぞましいその死骸などとても宅まで持ち帰る気にはなれないらしく、そのまま放っておかれてしまった。

老人は手紙で娘に報せ、娘は悲しみを綴った手紙を友人に送り、愛しき猫の回収を頼んだ。死体はその友人の手によって川縁から拾い上げられ、漸くシュンスケの望む通りの丁重さで葬られた。

シュンスケはその一部始終を見届けると、それから二度とその宅に訪れなかった。

それから随分経ってからの事である。一体自分の主人はどこで彼女と知り合ったと云うのだろうと、シュンスケは訝った。

更に一年近くが経って、彼女は一疋の猫をシュンスケの所へ連れて来た。可愛らしい牝猫である。主人も何故か乗り気だった為、シュンスケは他の猫との争いもなく、彼女とはその後、すんなり結ばれる事が出来た。

そして今、シュンスケには母親の死で味わったのと同じ大きな不安があった。

愛する彼女を守ってくれる筈の飼い主は、大の付く猫嫌いだと云うのである。

6

――猫だ。
――猫だ。
――猫か。
――猫が。
――猫め。

靖高が書斎に籠もりっきりになって、もう二週間が経とうとしていた。その間彼は、一歩もそこから出ようとはしなかった。食事も下女が部屋の前まで運ぶのだが、食べた形跡があるのは五回に一度ぐらいだった。

部屋にはあらゆる本が棄てられた様に散らかっていた。本棚には殆ど本が残っておらず、あたかも嵐が過ぎ去ったかの様である。それらはみんな、靖高がまるでむきになって本と云う本を読み漁り、次々とその足元へ落としたのだった。

靖高はぶつぶつと独り言を云いながら、或いは棚に残った本を手に取り、また或いは足元の本を再び取り上げて読み、長い時間そうして過ごしていた。

彼は今、躍起になって幸福論を考えようとしていた。が、彼の口からは、別の或る一つの事についてばかり漏れていた。

「あれは猫だったんだ……間違いない。シュンスケとか云う猫だ。何故猫が幸福論なんか聴きに来たんだ？　俺の幸福論を聴いて一体どうしようと云うんだ？」

妙の話では、梅村喜市に兄弟はなく、またこの土地には親戚さえもないと云う。

また、彼らは北海道へ引っ越して行ったのであるから、こんな所

へ遊びに来るなど不可能である。恐らくその青年とは二度と会う事もないだろうと云うのだ。
一方下男下女の話では、誰一人として訪ねて来る者はなかったと云う。下女は土間に居たし、下男は庭に居たのだから、誰か入って来たのならば分からない筈はないとも。
だが確かに梅村と名乗る若者が訪ねて来て、靖高から幸福論の講釈を受けたのだ。そして素早く身を翻して逃げる様に去って行ったのである。
と云って別段、なにか危害を加えられた訳ではなかった。だが、恐怖に憑かれた人間と云うものは、それがどれほど実際的であるかどうかでは判断しない。それが自分に為すあらゆる害を想定し、殆ど妄想と云ってもいい思考で想像を膨らませ考えるのである。
ただ猫が部屋の前に来ただけでも、彼にとって恐怖だったと云うのに、それが人の姿を借りて人語で会話したのである。だれがどう考えても、
『化け猫』、
だろう。
突然、襖の向こうに足音が聴こえた。
靖高はぎくりとして、耳の感覚だけを研ぎ澄ませた。
と、それは部屋の前まで歩いて来て、正にこの襖を挟んだ向こうでぴたりと止まった。
汗が少しずつ額を伝って流れ、顎にまで辿り着いて離れ、自分の足元で畳に音を立ててはじけるのが聴こえた。
「旦那様」
と、聴こえたのは下女の声だった。
「お食事を運んで参りました」
靖高は自分の余りの怯え方に、我に返って何だか恥ずかしい気がしたが、反動的にこれ以上ない程の安心が彼の心に満ちていた。
そうやって悪戯に時間ばかりが過ぎて行った。

それから――。
靖高は、いつの間にか座したままウトウトとしていたらしく、テーブルに置かれた西洋時計が、時刻は午後八時を差そうとしていた。洋燈（ランプ）の灯りは、油を与えられずにいた為に消えようとしている。
空は久しぶりに晴れ渡っているのだろう、襖の間から月明かりの蒼い条が、洋燈のほの暗い灯りを切り裂いて部屋の真ん中を延びていた。
靖高は洋燈に油を付け足しもせずに、再びその掌にペンを握った。

「人はその幸せを個々に見つけ、その爲に邁進すべきである。それを他人が完全に理解するのは殆ど不可能であり、故に個の幸福を具現化せんが爲に別の個を必要とするのであれば、それは生涯かけても決して実現し得ないだろう。それは人間の求める完全な幸福の理想が現実を超越し、且つ複雑化し、ほんの僅かな狂いが生じただけで最早その目的を完全に遂げる道はないからである。
「若しくは自己の幸福がなんであるかを見付けられぬ場合は、則ち遂げるべき目的がないのであるから、無意義な人生を送るか、或いは知性が僅か以上にある者は自殺する場合が多い。
「自殺の感情は然し、更なる知性によって転換されると、自己の存在意義等を確立させる爲に他者或いは多種生物を助ける行動に移す事も可能である。が、他方、他者或いは多種生物を殺して自分が助かろと云う行動に移る危険性も孕んでいる点は認識すべきかも知れない。
「他者を助ける感情は決して人間だけが持つ物ではない。寧ろ動物の方が強い事さえあると云う愛情論は自虐的であり賛同し兼ねるが、動物も強い感情で持っている事は間違いない。親が子供を助けるのは勿論、群を成して生きる者は同種族であれば自分の子供でなくとも助けるのである。
だがその点に於いて人間は、理性を有する唯一の動物であり、命の危機に関わらなくとも他者を助け合い、その命運を共にする事が

出来る事実は云うに及ばない。
「個の幸福が他者と交差する時、破滅は訪れない。破滅は離れる刹那以降に訪れる。則ち幸福が独りで成し得る物でない証明であり、必ず誰か或いは何かとの交差を必要とするのであれば、人間と動物と植物の間に垣根を造る事は如何にも間違いである様に思われる。共存共栄とは、個が幸福へと脱却する爲の重要な通り道なのである」

廊下を通り抜けて、土間から息子の喜ぶ声が響いて来た。
靖高は妙な胸騒ぎがしたと云うか、何か好からぬ出来事があったのだと、直感的に感じて襖を開けたが、一層大きく聴こえて来たその声には、案の定不快な名前が繰り返し叫ばれているではないか。
即ち、
「ネネ！　ネネ！」
と。
靖高は恐ろしい不安を抱え、ゆっくりと廊下を歩いて行った。どうやら皆は土間に居るらしい。
客間の前に来た。
つまり、目標の土間はすぐ目の前である。だが靖高が来られたのは、ここまでだった。そこで彼は、あり得べからざるものに我が耳を疑った。
土間から声が聴こえる。小さな、だが元気のある瑞々しい声が。

――ニィ。
一つではない。
――ニィ。
――ニィ。
――ニィ。

譬え他の誰が聴いてもその声と間違う筈はなかった。
靖高は廊下を大股で駆け抜けて部屋に戻り、襖をけたたましく閉

めた。それは猫に対する怯えと、もしかしたら妙に伝える警告の積もりだったのかも知れない。
それから座り、考えた。
（歓喜の声だったぞ、あれは。あの忌々しい畜生が幸運にも息せぬ肉塊になろうと云うのならば、寛二郎があんな声を上げる筈はない）
苛立ちはまだ湧き上がって来なかったが、怒りと恐怖は胸の内から露わになりつつあった。
やがて、恐る恐る近づいて来る足音が聴こえ、それが部屋の前で止まると、靖高の不安は一気に大きく膨れ上がり、問う事さえも恐ろしかった。
「……誰だ？」

――そこに居るのは人なのか？

が、聴こえた声は聞き間違う筈もない愛する妻のものだった。
「……あなた……」
靖高の不安はそれでも拭われなかったが、少なくとも応えられる気持ちは出来た。とは云え、それにしてもか細い声であるが。
「どうした？」
「あの……あなたに云わなくてはいけない事があるの……」
それが何かは、勿論既に靖高には解っていた。
「構わんから入って来い」
そう靖高が云うと襖が開き、妙の白い指と、それから彼女の黒い影が、蒼く輝く月を背景にして現れた。それはある種神秘的にも見え、靖高などでは到底逆らえない、とてつもない凶兆の様にも見えた。しかし、妙が怖れつつ部屋に入って来て、両の眉をすっかり情けなく下げて座るのを見ていると、俄然打ち克つ勇気が得られた。
「……どうした？」
靖高は襖越しにした質問を再び繰り返した。
妙はそれを云いかねている様子だった。靖高のこれからの反応を

怖れているのである。
「実はあの、ねえ、怒らないで聴いて欲しいの」
「何を？」
「あの……実は……ネネがね……」
彼女の上目遣いは、決して媚びている訳ではなかった。ただひたすらに恐れているのである。
だが靖高はそんな妙の心にも構わず、脅すつもりのある低い声で、
「……云ってみろ」
と、深く、鋭く細めた眼で、彼女の細い口を押さえつける様に睨み付けて云うのだった。その恐ろしい眼に、妙は思わず驚いて飛び上がり、掌を握りつぶして汗で湿らせてしまった。
（莫迦な事をした。なんと云えば、彼に殴られないで済むだろう？）
今、妙の頭の中で駆け回っているのはそれだけである。

（泣こうと云うのか？）

己がきちんとあの畜生を管理していなかったが故の結果であると云うのに。一つ思い切りぶん殴ってやれば、事の重大さに気付くかも知れない。そうやって妙の眼にうっすらと涙が浮かんでいるのを見ると、余計に腹立たしかった。
（泣きたいのは俺の方だ）
何時までも応えない妙に靖高は我慢出来なくなり、低く唸る様な声で一言、
「猫が産まれたんだろう」
と云った。
妙は驚かなかった。無論、靖高が慌ただしく廊下を駆けて行く足音が聴こえたからだった。彼女は怖れつつ正座をし、頭を下げて夫の赦しを請おうとした。
「……あなた、ごめんなさい……まさか、こんなに早く産まれるなんて思ってなかったものですから……」

「……それはどういう意味だ？　お前、産まれる事は知っていたのか？」
妙は、その問いに言葉を詰まらせた。靖高は彼女の頬を伝う涙に更なる怒りに駆り立てられつつ、もうこれ以上彼女を見たくもないと思い、顔を背けて部屋の中に向いた。

その瞬間――靖高は己の眼を疑った。

そして、訊いた。
「誰だ、お前は？」
妙にでは、勿論ない。
靖高は素早く立ち上がって飛び退り、妙を越えて襖に背をピタリと張り付けた。
そこには――暗い部屋の中、靖高の机のそばには、見た事もない男が足を崩して座っているのである。
実直そうな面もち。だが、その大きな鋭い眼は、まるで威嚇しているかの様に靖高を捉えていた。
「……梅村ですよ……先生」
見たこともない若造だ。
だが、聴き憶えのある声だった。そう、この部屋で、襖越しに聴いたあの無法な男の声である。
「妙……こいつがそうなのか？」
「こいつって？」
妙の頬はまだ涙に濡れていたが、靖高の指差す所を見るなりきょとんとしてしまった。
「……梅村なんだろう？」
そう彼は云うが、妙の見るこの部屋には自分と夫以外の誰も居なかった。だから靖高が何を云っているのか彼女には全く解らなかった。
「先生」

と、梅村と名乗る若者が云った。
「幸福論は書き進んでいますか？」
靖高は震える手で妙の腕を掴み、引き寄せた。その怯えは凄まじく、彼の手から云いようのない恐怖心が伝わり、妙も一緒になって訳も解らず怯えた。いや、もしかしたら一緒ではないかも知れない。彼女が怯えたのは靖高の、突然の奇行に対してだからである。
梅村は机から靖高の原稿を取り上げ、声に出して読んだ。
「或る生き物が、他の生き物の幸福を壊す事が自然の権利であるならば、同時に幸福の為に働く事も権利である。その為に幸福を感じる者があるとするならば、幸福は如何にも単純な部分で見いだす事が研究の第一歩ではないだろうか」
原稿から眼を離し、再び靖高を見つめた。そして、自分の手にしていたそれを差し出した。
「……何が目的だ？」
靖高は、恐怖が収まった訳ではなかった。だが、勇気と、何より怒りの勢いを借りる事で漸く話し掛けられたのである。
「この原稿はこうした方がいいですよ」
梅村はにこりともしない。
靖高は妙の腕を掴んだまま、梅村には近付こうともしなかった。
梅村は仕方なく、原稿を靖高の足元に投げてよこしたので、原稿はまるで無残に散らばった。
「どれでもいい、拾って読んで下さい」
靖高は怖れつつゆっくりとしゃがみ、一枚拾い上げたが、暫く梅村から眼を離さなかった。
「いいから読んで」
そう云った梅村の口調が微妙に低くなった様な気がした。同時にその声色も少しだけ変わった様に感じた。
靖高は、恐る恐る原稿を見た。そして、
「猫の為の幸せとは……」
と、一言口にして黙ってしまった。

「あなた……」
妙は不安に怯え続けていた。
彼女には若者はおろか、靖高が手にしている原稿すらも見えないのだから。
――主人の気が触れてしまった。
妙は靖高の腕を振り払おうとしたが、彼が余りに恐ろしい力で握り締めている為に、どうしても放す事が出来なかった。だが、それ以上に不思議なのは、靖高が少しも自分に眼を向けていない事だった。妙は助けを呼ぶのも忘れ、呆然と怯えるばかりだった。
「……これはどういう事だ？」
靖高は、この生意気な男を睨んで云った。
「そう書き直した方がいいと云う事ですよ、先生」
「俺は猫の研究をしている訳じゃないぞ。何故こんな物にしなくちゃならんのだ？」
「でも、猫の幸せも研究しているでしょう？」
「全ての生き物の……だ。猫だけを……お前らだけを研究してる訳じゃない。勘違いするな」
「先生。僕は頼みがあって来てるんです。先生」
煌々とした月が傾き、梅村の姿が蒼い輝きにすっかり包まれた。梅村は背中をクル病の様に丸く曲げ、足は胡座（あぐら）をかいてまことに格好悪く、その癖鋭い眼だけが奇妙な程に青く光っていた。
「僕の頼みとは先生、ささやかなものです。その幸福論に書かれている事を、先生自身が実行して下されればそれでいいんです」
「……実行だと……」
「そうです、先生。幸福を誰かの為に働かせると云うのなら先生。僕の妻と、子供達の為にしてくれませんか？」
靖高の眼には、恐怖と、怒りと、後悔とが複雑に、且つ交互に現れては消えていた。そして、更に別の原稿を取り上げた。
「あなた……大丈夫……？」
妙がそう訊いたが、靖高はその言葉には全く反応もせず、

「……子供……だと？」
と、梅村に訊いた。
梅村は、まるで誰かを抱き締めようとするみたいに、両手を広げ恍惚とした表情――靖高には不気味なにやけ面にしか見えなかったが――をした。
「いい夜ですね、先生。蒼い月が僕達の為に喜んでくれている。そう思いませんか？」
「……貴様の子供が……どこに居る？」
「現実から眼を逸らさないでくれ、先生」
梅村はそう云いながらも靖高を見ようとはしなかった。
「解ってる筈だ。どうして知らないふりをしようとする？　幸福論の為かい？　こんな紙切れが誰を幸せにすると云うんだ。あんたが望んだ訳じゃないくらいの事、解ってるさ。でもね、先生、幸福なんてのは、言葉にしてどうのと云うものじゃないんだぜ。生きる者を守るのに、どうして理論が必要なんだ？」
「……今すぐ俺の部屋から出て行け……」
「話を聴いて下さい、先生。僕は何も難しい事を云ってる訳じゃない。あんた自身がこの紙に権利と書いたそれを守って欲しいと云ってるだけだ」
「……帰るんだ……」
「……話を聴けって、先生……」
梅村の声が、更に低く下がった。
「貴様！　俺の部屋から出て行くんだ！」
「話を聴けぇ！」
瞬間、梅村の声がまるで虎の咆哮となって響き、靖高を更に壁に張り付かせた。
それは、妙には瞬間的な突風の様に感じられた。彼女は驚いて庭を見たが――部屋の中から風が吹くなどと思う筈もないのだから、それは当たり前だが――そこは静かな風にさえもそよいでいなかった。

「あなた……今のは何？……」
彼女には何もかもが理解出来なかった。
「この前訪ねた時、先生は最後の質問には答えてくれなかったね。今日もまた答えてくれない積もりかい？　哲学者ってのは先生、そういうもんなのか？」
靖高は暫し動けずにいたが、漸く勇気を振り絞ると、突然妙を押しのけて書斎から駈け出して行った。
妙は突然置いて行かれた驚きから、慌てて靖高を追いかけたが、靖高は一足早く居間の前を駈け抜けて土間へ飛び込むと、その仕切りを塞いで妙を廊下に留めてしまった。
「来るなぁ！」
靖高は妻に命令をし、仕切りを一つ、ばんと叩いた。
妙は再び驚き、後ずさりをして離れ、床にへたり込んだ。
中からは下女と息子の声が聴こえてきた。それは、靖高に対して何かを訴えているような響きだった。
「あなた……何をするの？」
妙は呆然としている。
一人書斎に残された梅村は、その襖の間から見える月を眺めていた。その眼の奥に虚ろな悲しみが映り、一条の涙が頬を伝って流れ落ちた。
「そうかい、炉に火を入れたのか……止めてくれって云ったって無理だよ……済まない、僕なんかの力じゃどうする事も出来ないよ……」
誰と話しているのだろうか？　目頭に溜まった涙がもう一条、流れた。
やがて、土間から幼い生命の叫びが響いた。
――ニャア！
一つではない。
――ニャア！

――ニャア！
――ニャア！

「やめてぇ！」
妙は両耳を塞いで泣き叫んだ。
息子の、罵声ともつかぬ泣き声も聴こえた。
下女の止めようとする声も。
「ごめんよ……ごめんよ……僕には……人の気持ちが解らないんだ……」
梅村は月を見つめたまま、ひたすら誰かに謝っていた。だが、突然靖高の机から原稿を取り上げて立ち上がり、
「こんなものはあの人には不要だ。こんな下らない幸福論なんか、僕が捨ててやるよ」
と誰かに話し掛けるみたいに云うと、素早い身のこなしで出て行った。
その後妙は、ひたすら泣き続ける中で、何か小動物の様な足音がすぐそばを駈け抜けて行くのを聴いた様に感じたが、彼女にとってそんなのはどうでも良い事だった。

7

靖高は書斎に居た。
原稿はどこに行ってしまったのか、一枚も見つからなかった。
久しぶりに見る青い空には千切れ雲が流れ、明るくのどかな庭の草木を揺らすそよ風が、気持ち良く吹き込んでいた。
筆は一向に進まないが、その表情は全くの安らぎを得ていた。
と、下女が廊下に現れた。
「貞方様がお見えです」

「通してくれ」
靖高は振り返りもせずに云った。
やがて部屋の前に、貞方が現れた。
「どうだい、幸福論は？　進んでるか？」
明るい口調だった。
靖高はゆっくりと振り返り、貞方をじっと見つめた。そして、にこりと微笑んだ。
「まだだよ」
と、落ち着いた声で一言だけ応えた。
「災難だったな、あんなに書き進んでいたのに。ま、でも、君ならまたもっと洗練された物が書けるよ。どうだい、気分はいいんだろ？　表情がそう云ってるもの」
靖高は応える代わりに、再び笑って見せた。
貞方は、ネネの事は既に聴いていたが、猫を押し付けた責任を感じて、一切靖高を責める積もりはなかった。

あの晩。
妻と息子を泣かせ、下女に責められたあの晩。
原稿を全て失くしたあの晩。
突然土間に三毛猫が飛び込んで来て、ネネを誘い、連れ去ってしまった。
その数日後、野良猫として生きる二疋を見掛けた事があった。彼らは靖高をじっと見つめていたが、やがて藪の中へと潜り込んで、どこかへ行ってしまった。
家猫と云う、食と安全が保障された居住を捨て、危険な自由を選んだ二疋の猫。
「誰かを守るのに、どうして理論が必要なんですか？」
シュンスケの言葉が、不意に思い出された。
だが、靖高にその思想を肯定する積もりは少しもなかった。
彼らの姿は、靖高しか見ていなかった。

そしてそれ以後、誰もネネとシュンスケを見掛ける事はなかった。

靖高はおもむろにペンを握った。

「お、とうとう書くのか」

と、貞方は嬉しそうに訊いた。

靖高はペンを原稿用紙に押し当て、暫く考え込んでいたが、書く内容が纏まっていなかった訳ではなかった。それを書くのに躊躇いを感じていたのだ。

が、漸く書き出した。

いつもの様に、声に出して。

「幸福とは全ての生き物が平等に得る権利であり、決して誰にも邪魔されるものではない。その一番始めにあるのが生きる権利であり……」

――にゃあ。

どこかで猫が、批判するように鳴いた。

終

最終回（後書き）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9792h/

「猫」　値打ち三文の幸福論

2010年10月8日14時40分発行